

8. まとめ

ここまで 20 歳の節水意識調査の結果を 30 歳と共に概観してきた。本調査の目的は、20 歳の節水意識の実態を明らかにすることにあった。調査結果は以下の 10 点にまとめられる。

- (1) 86.3%の回答者が、節水を必要と考え、59.5%の回答者が実際に節水を実施していると思っている。
- (2) 節水を必要と思っているが、節水実施にいたっていない回答者が 28%存在する。
- (3) 節水実施のきっかけでは「水道料金が高かった」という節約志向の回答が 53.4%で 1 位、「環境問題を考えた」という環境志向の回答が 45.0%で、両者が並立している。
- (4) 実際の節水方法は「蛇口の水を出し過ぎない」が 66.8%で 1 位、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」が 65.0%で 2 位で、「出る水」に対する節水が高い割合を示している。一方、「風呂のお湯を洗濯や掃除に使い回している」は 19.8%、「食器を洗う時は洗い桶に水をためて、水を出しっぱなしにしないようにする」が 15.5%と、「ためる水」に対する節水は低い割合となっている。
- (5) 節水を必要と考える第一位の理由は「水道料金を抑えるため」が 39.8%で第一位、「水がもったいないから」が 32%、次に「環境を守るため」が 12.8%となる。この三つの回答者は「節約」「もったいない」「環境」という節水に対する三つの志向を代表していると考えられる。
- (6) 節水を意識した時期は、20 歳は小学生から大学生までの各ライフステージにばらついていて、30 歳は「社会人になってから」が第一位で 31.5%となっている。社会人になってから意識する節水意識と 20 歳の節水意識が異なる可能性がある。
- (7) 「これから節水をさらに進める上で必要なこと」の第一位は「一人ひとりの心がけ」と、他者に促進要因を求めるよりは、個人に促進要因があるとする心の問題として意識されている。
- (8) 飲料水は自然の恵みと社会資本の両方のおかげだと思っている。
- (9) 家族以外の他人が節水をしていない光景を目にした時、その人に注意するという人が 29.5%存在する。
- (10) 節水を「節約志向者」「もったいない志向者」「環境志向者」に分けた場合、「節水方法」「節水の大事さを知る上で大事だと思う経験」でわずかながら差が認められる。また、「これから節水をさらに進める上で必要と思うこと」については顕著な差が認められる。

「これから節水をさらに進める上で必要と思うこと」においては、「もったいない志向者」が、30 歳になると「節約志向者」に近づき、「環境志向者」とは離れている。

以上の 10 点が本調査での結論である。

では、20 歳の節水意識の特徴とは何か。

これを一口で表すのは難しい。あえて言えば、節水意識は高いし実施もしているが、節水の意味（動機）は 30 歳に比べ「節約」にこだわっているわけではなく、「もったいない」や「環境」をもより重視していると言えるのではないだろうか。家計の節約手段として節水を意識する面も無論あるのだが、それと共に、水そのものの無駄を嫌う「もったいない」や環境重視の側面も見逃せない。これを 20 歳の節水意識の抽象性と見るか、節水意識の新たな特徴の萌芽と見るかは今後の調査を待たねばならない。

節水については既に「節水に関する特別世論調査」（内閣府政府広報室）が実施されているが、節水そのものの意味については踏み込んでおらず、いくつかの合成概念としての節水の意味については、本調査と共に大きな課題となっていこう。

また、「もったいない」は、必要以上の消費をしないという意味と、自然環境への恐れ・尊敬の念という意味を併せもった言葉としてワンガリ・マータイ氏がその重要性を主唱したことで知られている。節水意識の面からも「節約志向」と「環境志向」の間に、この「もったいない」を回答する 20 歳が多数存在したことは、生活意識としての「もったいない」の詳細な分析が必要であることを示唆して

いる。今後の課題としたい。

さらに、節水意識と衛生意識の関係や、入浴・洗濯スタイルとの関係、回答者の可処分所得と節約意識の関係、節約方法における節水の位置づけなど、調査すべき課題は多々ある。節水の意味を分類すれば、各分類における回答者の T.P.O も異なり、節水行動も異なってくると予想される。これらについても今後の課題としたい。